

## 映画「西の魔女が死んだ」

撮影者としてのアプローチ

Feature Film “The Witch of The West is Dead”  
A proposal of Insect Resort Facility

映像メディア学科・教授  
Department of Visual Media・Professor

渡部 眞 Makoto WATANABE

## 1 製作経緯

### 1.1 役割

梨木香歩<sup>(1)</sup>原作「西の魔女が死んだ」は2007年に監督・長崎俊一<sup>(2)</sup>によってアスミックエース<sup>(3)</sup>（柘植靖司プロデューサー）で映画化され、翌2008年6月21日より東宝系劇場で公開された。私は撮影監督としてこの映画に関わり技術的なサポートをした。

### 1.2 原作

原作は全国の推薦図書として学生を中心に読まれ、100万部のベストセラーになっていたが映画化は難しいとされていた。原因は若手人気俳優の出演もなく、おばあさんと孫が中心にいただけ、またアクションやSFX（Special Effect）などの見せ場があるわけでもないのでストーリーの盛り上がりにも欠かされたようだ。映画の配給側としてはこうしたうまみがないと踏みだしにくい。また内容として中学生の孤独な内面や、いじめ、死という現代日本のテーマが扱われており、主人公まいの抱える煩悶が描かれていて、シリアスな問題であるが中学生の問題だけにこれを「売れる映画」として製作出来るのかに不安があったようだ。

### 1.3 柘植プロデューサー

しかし担当プロデューサー柘植靖司<sup>(4)</sup>は永年あたためてきたこの企画を早く観客に届けるべきだと考えていた。彼は会社にながらまるで個人的な映画を作るかのように、熱心に会社を説得し、製作の了承を得た。クランクインの前日彼が全スタッフを前にした挨拶の途中で号泣したときは、その苦労が忍ばれた。

### 1.4 原作者の意図

私が参加する以前にシナリオライターからいくつかの素案と初稿があがっていた。原作者の梨木果歩は映画化に対して厳しい姿勢で臨んでいた。それは映画を「ファンタジーにしてほしくない」というものだ。これは「魔女」というキーワードが「ハリーポッター」や「ナルニア国物語」で想像されるように都合の良いときに駆けつけてきて危機を救う超人ではないということを基本姿勢として貫きたいということでもある。ここでの魔女は自らの運命を自分に引き寄せ、責任を引き受け、機知によって処理していくことである。これは自然と慣れ親しむためならばだれもが身につけてはいけない「知」でもある。自分のいる位置、家の建て方、天気を読み方などを知ることは自然を相手に生きるために最低限必要なことである。原作のシナリオ化に際しても梨木は現実からの遊離を嫌った。結果最も原作者の意図を知る監督自らが脚本を手がけることになり、物語は豊かな自然とリアルな方向に変えられ、形而上的な描写は薄れていった。

## 2 映像化の課題

### 2.1 原作と映像

撮影という作業はイメージを堅めていく作業である。とくに原作のある脚本の場合は読者のイメージがかなり明確に作られているために、映像を見た場合はその齟齬を感じて反発を招くことが十分にあり。作り手もそこではなにかのイメージを共有しつつ想像力と地理的な制約の範囲で作り込んでいくことになる。それを「着地」と呼び、また「立ち上げる」という言い方で私は表現する。それは文字で書かれて夢想されたイメージを交換不能で動かしようのない映像にして定着させる作業だが、同時にそれは監督や撮影監督のイメージを観客に強制していく作業でもある。いつも観客と共有できる部分が多いことをひたすら願うしかないのだ。

### 2.2 地理上の整合性

打合せでは原作に出来てくる「T市」とおばあちゃんの家との関係。そしてその緯度、高度というものが準備期間中に取り上げられた。人物や地域の名称から日本という地理的な限定から自由になることは難しく、憶測される距離が映像化の条件にもなってくるわけである。今回「T市」がつくば市であれば父親の勤め先などから想定して、おばあちゃんの家は多摩丘陵近辺であると憶測された。

### 2.3 映像の整合性

これは一見正しいように思われるが、映像化すると逆に混乱してくる。それはつくば市と多摩丘陵は地理的には100キロ離れているものの、緯度としての差がなく「植生」の変化に乏しい。これによって導き出されるのは、シーンの背景にある植物が似通ってくるということである。映画における背景は映画のトーンを決定する。これが似ているということは、差異を明確にできないということにもなる。

### 2.4 イメージの探索

#### (1) 美術

撮影者は脚本に沿うように俳優を記録するだけでなく、かなり前の段階からプロデューサー、監督、美術監督、照明と一緒に作品のビジュアルを探っている。今回美術監修・種田陽平<sup>(5)</sup>と美術の矢内京子はたくさんの資料を提示しながら、原作の持つ「聖性」を具体的な緯度の違いで示していた。高度1000mと2000mの植物は明らかに異なり、打合せを重ねるにしたがっておばあちゃんの家はしだいに「高み」にあがっていくことになる。これに沿って制作部が具体的な場所を特定していくが、緯度としては仙台、高度としては長野県や岐阜県などが想定され調査が開始された。

#### (2) 清里の条件

清里の清泉寮<sup>(6)</sup>近辺が候補対象になった時は、高度や地理的条件などのほかに協力体制、駐車スペース(30台以上の車が往来する)、宿泊場所(50人が寝泊まりする)が検討された。しかしそれ以外にも問題はあり、はたして撮影の時期(5月)に若葉が生い繁るか、国定公園での増改築の許可、ハーブを植えることの見否、セットの完成までの工期などが危惧された。

## 3 テクニカル・スカウト

すべてのロケーション(撮影地)が決定されたあとに、テクニカルスカウト(Technical Scouting省略してテックスカウト、Tech-Scoutとも言う)ということが行われる。これは決定された場所を各部署の責任者がチェックしていく段階である。たとえば美術部(各セクションは「部」という名前に分けられる)は建物の構造、壁の色、調度品などを見、照明部は天井の高さ、窓の位置、ブレーカーや配電盤、太陽の傾きなどを見る。撮影監督はそれらを総合的に見ながら、人物の配置、床の具合、光の加減、木々の隙間もチェックしていく。

### 3.1 オープンセット

おばあちゃんの家はいわゆる「オープンセット」(Open Set)という範疇である。これは外に建てられたセットということだが、今回は内部でも撮影されることになる。すなわち内部もしっかり家として出来ていなくてはならないわけである。オープンセットの作り方はいろいろあるが、普通は外観が出来ていればあまり細部にはこだわらない。なぜならば中に入るところで屋内セットに切り替わるのが通常だからである。セットというのはスタジオのなかに建てられたもので、最低限の壁以外は取り外しがきいてレンズの選択肢があり自由度が高い。また照明の角度も選べるため効果的な映像をねらうことができる。「西の魔女が死んだ」では予算の関係でセット撮影はかなわず、オープンセットを作り込んで、中でも撮影するという方法をとった。これはセットでありながら「ロケセット」すなわち既成の建物の利用と同じやりかたである。

### 3.2 レンズの選択

映画では35ミリフィルムを縦に使うことからスタンダードサイズの撮影領域は22mm×16mmとなり、レンズでは焦点距離が18mm、20mm、25mmが広角レンズ領域になる。その特性は被写体との距離が近くても広い画角が確保できることだが、遠近が強調され、特に室内においては垂直、水平線のゆがみが出てくることなどがある。しかし50mm、85mmというレンズを選択するためには被写体との距離が必要になるので畢竟ロケセットでは無理が生じ

る。この見極めがテクニカルスカウトのテーマでもある。

### 3.3 美術セット

美術のチェックはテクニカルスカウト最大の目的である。私なりのチェックポイントを挙げると次のようになる。

- 1) 脚本に沿っているか
  - 2) 撮影対象として違和感がないか
  - 3) 撮影場所(カメラポジション)を確保できるか
- 特に主となるカメラアングルは入念なチェックを行う。

### 3.4 違和感と修正

セットの初見でいくつかの不満足な箇所が見られた。これはデザインの間違いということではなく、あくまでも撮影者の視点から作業上感じる不都合な点ということである。それは、

#### (1) 段差

キッチンとリビングはつながっている一つの空間であるが、その境界を床の段差で表現してある。ここに疑問を感じた。実際の家であればアクセントになるが、撮影時にはカメラの移動に不都合であったり、人物をクローズアップで追っているときには急に上下にふれることが予測され、そこでは当然歩く速度も変わってくるのではないほうが良いのではないかと思った。この点については修正する場合は建物の構造を基本からやりなおすことになるので不可能と判断し、撮影時に人物サイズを少し広めにすることで対応した。

#### (2) タペストリー

もうひとつはマントルピースの上にかかっていたタペストリー。これはデザイン画の段階から気になっていた。単体として魅力があるものの違和感を感じた。リビングルームの正面は重要なキービジュアルでもあるので、背景が前景よりも目立つのは趣旨が違ふと思う。しかもその位置には照明効果として昼光が強く差し込む予定であるので、沈んだ色調のほうが良いと説得。この相違はテクニカルスカウト後にスタッフルームまで持ち越し、暗い色調の枠をつけ、タペストリー自体を小さくすることで決着した。些細なことのようにこうした細部を検討することが映画のトーンとテンポを作っていく。例えばドアの取り付け場所ですらシーンに合わない場合は変更する。溝口健二監督が美術セットの長さに合わせるように台詞を現場で変更させたというエピソードも両者が密接な関係を持っているという証左でもある。

チェックは場所ごとに、次にはシーンごとに行われる。監督は俳優の立つ位置、動きの予測を行い、撮影者はレンズの選定と光の方向性や機材の種類と個数、照明ケーブルのルートなどを見ていく。細かいカット割りは撮影直前に行うが、光の回り方とカメラポジションはチェックしておく。



写真1:リビング正面

### 3.5 映画空間の成立

映画の空間がつながっているように見えるのは、カットで分けられた映像の断片を観客が自分なりにまとめ上げて空間を作っているからであり実際の空間とは異なっている。映像制作者によって空間も時間も著しく曲げて表現されている。ここでの整合性は観客の中にしかない。

## 4 映像情報と認識

人間の目の画角と撮影レンズのそれとは異なるので、実際よりは広い空間で初めて人間の広さの意識に見合うサイズになっていくのである。また視覚情報は記憶として残り、上映中は他の映像とも関連してとどまるので、これを利用して観客の時空を作り上げる。観客は見えるものだけで空間を構成していかなくてはならないので、映像作成者は時間軸に沿って映像を提出していくことでどれだけの情報をどこでいつ与えるのかをコントロールして進めていく。この時、映像が他の芸術のように世界を物語る(Narrative)のである。

#### 4.1 家の意味

祖母の家は守られるべき場所であり、受け継がれるべき場所である。またまいにとっては避難場所にもなっている。これはよく言われる「家」の原風景でもある。それはこの映画のイメージとして多くの人が家を思い描くことや、そのロケ地が長い間人気の観光コースにもなったということにもつながる。我々制作者もこの家をどのように見せるかを検討した。

#### 4.2 家の全景

おばあちゃんに迎えられた母と娘は一緒に家の方向に向かって歩いて行く。しかし私にとってこのシーンで伝えておきたいポイント

ントは3人の関係ではなく家であった。ここでは古さ＝思い出という意味を付加している。そしてまた和洋折衷の様式からおばあちゃんが外国人であり、長い間日本にいたという暗示もある。これは異物として他国に存在することであり、まいが感じる疎外感に近い。また入ろうとしている人間と比較してわかる家の大きさ、ハーブ類の位置、門柱との距離、木々の生え具合など生活の重要な要素も示される。人が門を過ぎたあたりからゆっくりクレーンがあがっていき、木々をナメ(前景に置くこと)ながら3人と家の全景を見せる。人が歩く姿は最終的に家へ吸い込まれるために使われていると言っても過言ではない。また木をナメることでこの家が木々に囲まれている印象を強調する。それは同時に他からの孤立をも見せようとしたものである。

### 4.3 セットの構造と意味

#### (1) 見切れ

家と門柱と道は一直線に並んでいない。門柱を節目に家は内側に入り込んでいて、道の端から家は見えない。これは景観としての工夫であり、「見切れ」と呼ばれ、映画独特の道の作り方でもある。見切れとは舞台すべてを見通せず、その連続性を示しつつも閉じていくというセットの仕組みである。道が直線ではなく緩やかにカーブしていったり、路地が斜面で行き止まっていたりする。ジョンフォードの「わが谷は緑なりき」(1941)の職場に向かう道や、成瀬巳喜男が「山の音」(1954)で見せる生け垣のある路地、川島雄三のしもた屋、山中貞雄「人情紙風船」(1937)の長屋の路地。どれも登場人物の背景として収まるように見せながら、実は人が消えていくことを前提とした作りになっている。見えなくなっていくことでシーンが終わり、次のシーンにつなげていく。そういう意味でこの門柱は「境界」としての象徴的な意味合いを持っている。

#### (2) 並木道

ではその手前にある並木道はどんな意味を持っているのか。風に揺らぐ若葉がきれいなこのアプローチはかなり残酷な場所として記憶されるべきであろう。何度も登場するこの道は出来る限り直線であることを強いられている。すなわち見通しが良い。そのためまいはすぐに隣人の源二と出会ってしまうことになり、そこで大人の男の肉体を意識させられる。また母がまるで罪を犯したかのように早朝車で去っていくのもこの場所である。父親がまいに決断を迫りに来て、郵便屋が外の情報を届けるのもこの道からである。

#### (3) 直線

道からは森を背にした門柱のみが見通される。家があることは想像できるが門柱の中に入らなくては見えない。そして直線であるためにひとは立ち止まることができない。見通しが良いことが有

利に働くことはなく、この道でまいがおばあちゃんと口も聞かずに別れるシーンではおばあちゃんは視野にいつまでも残ることになる。まいにとっても観客にも残酷な別れのシーンが成立するのは二人が見つめ合うからではなく、こうした道の持つ直線が演出しているともいえる。これは単なる感情表現の領域ではなくきわめて具体的な映画の道具立てが担っている表層である。ここでまいはおばあちゃんから目をそむけることができず、長い間見続けるという時間を強いられる。直線だけが持つ視線の凝視である。テックスカウトでは監督も私もこの道の長さや直線性にこだわった。道をもっと長くできないかということや要求し小さく迂回していた道を削ってまっすぐにした。また車で撮影を考えて地面の凹凸を極力なくして欲しいと要求した。結果として、孫のまいのまなざしに遠ざかるおばあちゃんを長くとどめると同時に移動のスムーズさを図ることが出来、感情を押しつけない透明な抽象性をすら感じさせられたと思う。「西の魔女が死んだ」を見終わった後に感じる虚実のはざまは確かにこの道の存在にも起因する。

### 4.4 映像と意識

おばあちゃんの家は木で囲まれている。3月のロケハン時に来たときは枯れ木ばかりで冬の日差しが降り注いでいたが、5月後半からは葉も大きくなり日差しを遮る時間が長くなっていった。撮影者にとって「日が射しこむ森のなか」での撮影というのは難しい課題である。それは太陽の直射光と遮られた日陰の露出比率が1:32(絞り値で5絞りの差くらいあるからで、露出の測定と絞り値の決定は経験を積んでいても迷うものである。また影になっている部分はニュートラルに暗くなっているわけではなく、木の葉の色を反映して緑色を帯びて顔にそそぐわけで、補助光はこれを補正して肌の色に戻すということも考えなくてはならない。

## 5 結語

撮影は繰り返しができない一過性のものである。そこにあるのは原理と応用と経験である。また観客におよぼす効果も計測できず、受け手である観客個人の状態によって変化し、人数によってばらつきもでる。ではそれは実体がないかといえば、むしろそれゆえにこそその確固とした実感がある。それは映像が抽象性を持つときにもあてはまる。原作から脚本を経て映像化に至るプロセスを経て画面のなかにちりばめられる事物は現実のものでなくてはならない。

一度おかれた事物は繰り返しがきかないので、撮影時は慎重さが要求される。そしてここには意味の抽象性を排除した運動がある。映像を媒介にしなくては成立しない「物語」という戯れがここにある。ここで言う「物語」はストーリーのことではなく、素材の運動

や変化が「意味」を確定せずに散在していることであり、それを個人が自らのフィルターで抽出を行う作業を指す。そしてこれも一種の意味作用といえるであろう。

ただその映像をいずれかの抽象性に届かせるために、映像は常に具体的な場面を記述することでしかなし得ないという皮肉があるのは確かだ。

浮き上がりがちな抽象性を避けて、常に具体的な表象に押しとどめるには相当な力業が必要である。また自身の持つ映像の下位意識もなかなかぬぐうことができない。映画が本来のたまたまをもって私の前に微笑むことは難しいのかもしれない。

映画は2008年6月に公開された。

監督:長崎俊一

エグゼクティブ・プロデューサー:豊島雅郎

プロデューサー:柘植靖司、谷島正之、桜井勉

脚本:矢沢由美、長崎俊一

撮影監督:渡部眞

照明:和田雄二

録音:弦巻裕

美術監修:種田陽平

美術:矢内京子

編集:阿部互英

音楽:トベタバジュン

出演:サチパーカー、高橋真悠、りょう、大森南朋、高橋克実

#### 注釈

- (1) 梨木香歩  
1959年生まれ。児童文学作家。イギリスに留学し、命と心についての著作が多い。児童文学ファンタジー大賞、新見南吉児童文学賞。
- (2) 長崎俊一  
映画監督。1956年生まれ。  
「ユキがロックを棄てた夏」、「九月の冗談クラブバンド」、「誘惑者」、「死国」。
- (3) アスミックエース  
ヘラルドエースとして始まり、配給を種としていたが、1985年に黒澤明「乱」に出資、以降製作と配給を手がける。
- (4) 柘植靖司  
映画プロデューサー。ヘラルドエース時代から制作を手がける。  
「死国」、「阿弥陀堂だより」等。
- (5) 種田陽平  
美術監督。「キルビル」、「イノセンス」などを担当。
- (6) 清泉寮  
山梨県北斗市にある観光地。ポールラッシュが1946年に青年訓練施設として作る。



写真2:おばあちゃんの家全景

